

白藍塾オリジナル

2014入試小論文分析&解答のヒント

2014年4月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志

●慶応・商学部

今年度も、二つの大問から成っているが、昨年度に比べて計算問題が増え、かわりに記述問題が減っている。どちらもとくに難しい問題はなく、計算問題に抵抗がなければ、例年よりも簡単に感じられるはずだ。

Iの問1は、これまでの商学部には見られなかったタイプの問題だが、読み取りの練習をしっかりとしてきた人には、簡単な問題。冒頭と末尾がわかっているので、「まずはこのように言えるのではないだろうか？」で始まる「カ」から、「だが、だからといって贅沢を肯定するのはどうなのか？」で終わる「オ」まで、文章の流れを考えて再構成すればよい。

問2は、課題文中の「浪費」と「消費」の違いが理解できていれば、問題ないはず。問3の答えでもあるが、「消費」の対象となるのは、「物のイメージや意味、その魅力などの諸情報」。それを踏まえれば、「消費」に当たるのは、モデル・チェンジのたびに車を買って換えるN氏やファッション雑誌の情報によって服や靴を買うNさんの行為だ。そして、それ以外の二つが「浪費」になる。

問4は、「過剰／希少性」「消費／浪費」といった用語の対照さえ押さえられれば、これも問題なく答えられる。

総じて言えば、Iの問題は、ふつうに読解力があれば簡単に答えられるはずだ。

IIは、Iに比べれば少しややこしい。

問1で難しいのは、「ペットボトル」「マグロ」「金・銀」だろう。「ペットボトル」と「金・銀」(金属類)が同列に置かれるのは変な感じだが、いずれも枯渇性とはいえ、再生(リサイクル)可能。したがって、「再生可能な枯渇性資源」になる。また、「マグロ」(生物)は生物資源なので更新可能ではあるが、人間に乱獲されると絶滅する恐れがあるので、「人類の活動に左右される更新可能資源」に当たる。

問2は、単純な計算問題。「期首の可採埋蔵量」から「10年間の生産量」を引いて「10年間の可採埋蔵量の追加」を加えれば、「期末の可採埋蔵量」になる。それがわかれば、あとはミスをしないように計算すればよいだけだ。

問3は、課題文中に「期首の可採埋蔵量を年間生産量で割ると可採年数が計算できる」とあるので、その通りに計算すればよい(問2の表からわかるように、2011年の可採埋蔵量は、2001-2010年の期末の可採埋蔵量と同じ)。

問4は、まず13万トンすべてを輸出すれば、売上高は195億米ドルになる。そこから、2010年度の売上高（輸出した3万トン+国内で消費した残り10万トンの売上高）を差し引けば、85億米ドルとなるだろう。米ドルと元の換算を間違えなければ、これもそう難しくない。

問5は、希土類を需要（消費）する側と供給（生産）する側の違いがわかれば、難しくない。（あ）（え）は需要する側の事情、（い）（う）（お）は供給する側の事情。それによって価格が上がるか下がるかは、「需要が増えれば価格が上がり、供給が増えれば下がる（またはその逆）」という経済の常識で考えればわかる。

問6と問7は、課題文を読めばわかる。中国の主張は、「資源の枯渇と環境破壊を抑えるために希土類の輸出を制限する権利がある」というもの。「重希土類」については、課題文の最後の段落にあるように、世界的に不足しており、実際に著しい環境破壊ももたらしていることがわかっているので、中国の主張には正当性があると認められる。一方、「軽希土類」については、決して不足しているとは言えず、環境破壊もひどいとは言えない。そのため、これについては中国の主張は認められない可能性が高いわけだ。そうしたことを、字数以内にまとめればよい。

問8は、今回の設問の中では最も歯ごたえのある問題。だが、輸出国が輸出制限をするのは、そのほうが利益があるからだ。それを考えると、希土類の場合、採掘してすぐに輸出してしまうより、加工処理まで国内でやってしまうほうが、付加価値が高くなり、その分儲けも大きくなることがわかる。そのことを、字数以内にまとめるとよい。

◎執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室（03-3369-1179）

<http://www.hakuranjuku.co.jp>